

TEMPUS テンプレス

2009年(平成21年) **38**号



願泉寺表門の彫刻



願泉寺表門

も く じ

願泉寺表門と鐘樓の保存修理事業

願泉寺表門の修復年代について～願泉寺の古文書から～

第87回かいづか歴史文化セミナー報告

「重要文化財願泉寺 現地見学会」を開催しました

古絵図をひも解く

古文書講座

貝塚市の風景～南海貝塚駅周辺～



願泉寺鐘樓



願泉寺表門と鐘樓の保存修理事業

願泉寺の保存修理事業は、平成16年7月から着手されており、現在は本堂内部の修理と表門・鐘樓（しょうろう）の半解体修理が行なわれています。今回は、その修理過程で明らかになったことを中心に紹介します。

表門

表門は、大型の四脚門〔しきやくもん：本柱2本の前後に控柱（ひかえばしら）4本の構造〕で、切妻造り・屋根は本瓦葺きで、その建立年代は、記録によると延宝年間（4ページ参照）とされています。

今回の修理は半解体修理とし、屋根瓦を降ろし、野地板（のじいた）を解体しています。小屋組（こやぐみ）は解体しませんが、垂木（たるぎ）の一部や懸魚（けぎょ）など、損傷が著しいものについては取り替える予定です。

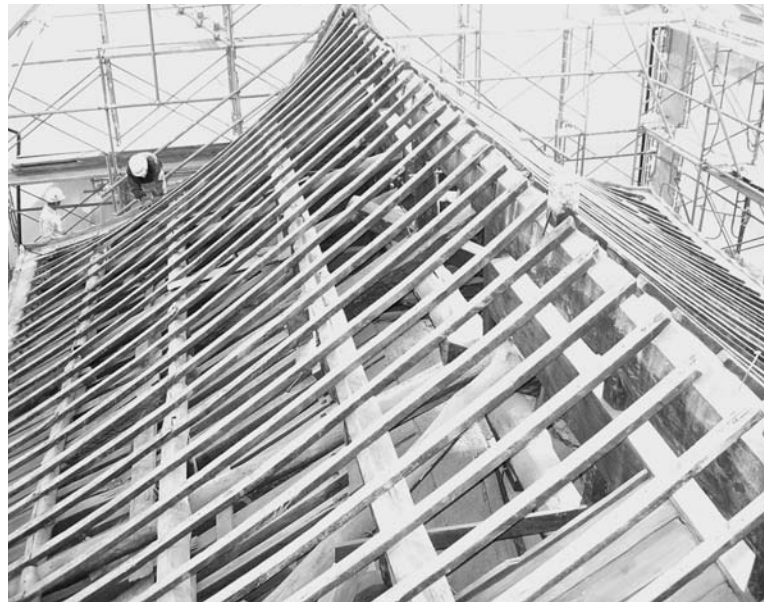
解体工事の際、小屋組に打ち付けられている修理札が発見されました。

修理札には、本願寺第十一世顕如（けんによ）の二百回忌にあわせて寛政3（1791）年に屋根瓦の葺き替えを中心とした修理が行なわれたことの経緯や修理に携わった職人（工房）名などが記されています。そのなかに「瓦師」として「瓦屋治郎兵衛」、「同七兵衛」、「同定平」の名前が見られ、複数の瓦職人の手により修理が進められたことを知ることができます。

また、表門に葺かれていた瓦には「瓦治」、「泉州貝塚瓦屋七兵衛」、「泉州貝塚



修理前の表門



修理中の表門（屋根部分）



表門の修理札

瓦屋定平」の刻印が見られ、修理札と表門の瓦の刻印の名前が一致したことで、屋根瓦の葺き替えについては、寛政3年に大規模な修理が行なわれたことが事実となりました。

表門の柱の調査では、控柱4本の根元に石材が根継ぎされていることがわかりました。これまで本柱や控柱の根元は、銅板で覆われており、解体するまでわかりませんでした。使用されていた石材は幅34cm、高さ21～39cmの四角に加工された花崗岩です。控柱の根元が腐食したためにその箇所を切断し、石材を継ぎ足したものと考えられます。修理設計を行なっている財団法人文化財建造物保存技術協会の担当者によると、このような根継ぎの方法はあまり例がないそうです。

柱の根元が腐朽した場合、一般的には柱と新しい木材を加工して組み合わせますが、その場合、柱を持ち上げる必要があります。石材を用いた理由については、柱の足元の位置を高く設定し、腐朽を防ぐ工夫であったと推測されます。

今回の修復工事では、石材が損傷しているため、ジャッキアップ工法（重量物を持ち上げる工法）で表門全体を持ち上げて、石材を取り替える予定です。

その他、表門の金具を取り外した際に、明治42年の年号が記された金具が発見されました。明治期に交換された金具は、以前のものよりもサイズが大きく、以前の痕跡を隠すように取り付けられていました。

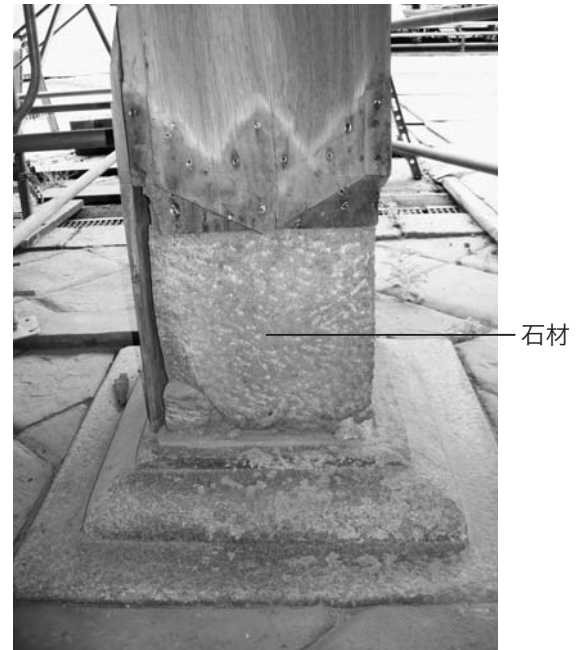
鐘楼

鐘楼は、4本の柱を建て、屋根をかける簡略な吹き抜けの構造で、銅鐘を吊り下げるための建物です。もともとの鐘楼は、太平洋戦争の際、空襲により焼失しています。現在の鐘楼は、元禄13（1700）年に建てられた青松寺（貝塚市森）のもので、戦後に移築されたものです。

当初の予定では、鐘楼の半解体修理は屋根瓦の葺き替えが中心でした。しかし、詳細に調査をした結果、腰貫（柱と柱を繋ぐ部材）が折れていることや柱が割れているものがありました。これらの破損した部材は、取り替える必要があるために、屋根を持ち上げる大掛かりな工事となります。

また、鐘楼の屋根瓦は、製作時期やサイズなどが統一されておらず、鐘楼のために製作された瓦ではなく、移築に伴って寄せ集められた瓦を葺いていると考えられます。

表門と鐘楼の修理は、本堂と同じ平成22年の12月に終了予定です。



表門の控柱の根継ぎ



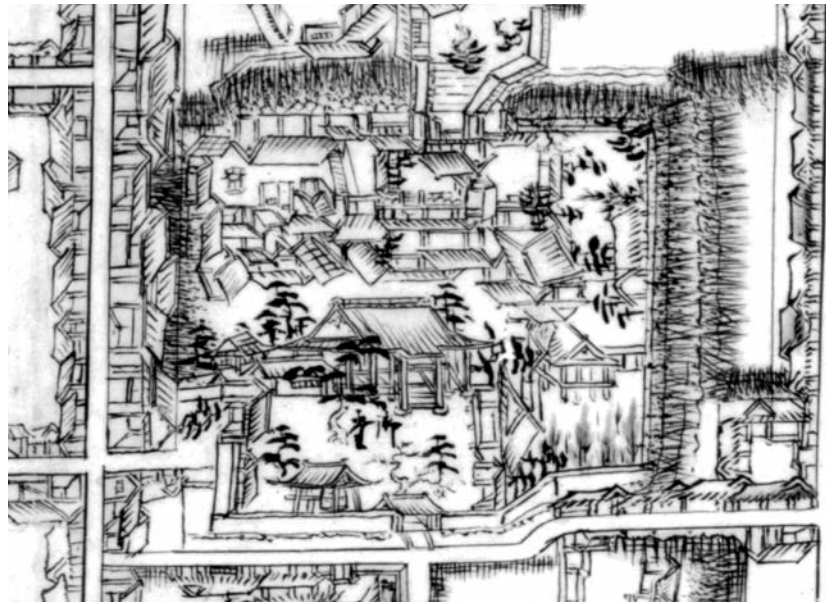
修理前の鐘楼



修理中の鐘楼（屋根部分）

願泉寺表門の修復年代について ～願泉寺の古文書から～

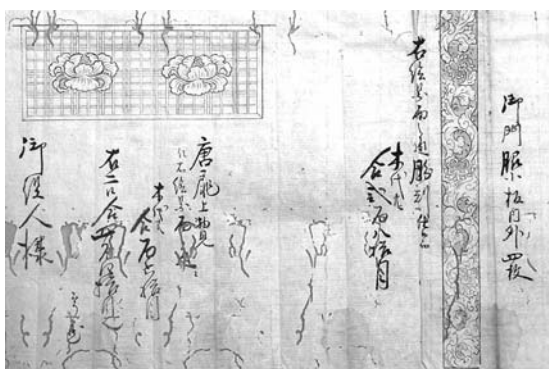
願泉寺表門は、当初の建築年代は不明ですが、慶安元（1648）年の貝塚寺内絵図にはすでにその姿が描かれています（右写真参照）。また、天保年間（1830～1844）にまとめられた「貝塚大工之由緒書・大覚寺宮令旨之写・棟梁系図」という記録には「古御堂之塀地門」という表現があり、現本堂の前身本堂（伝承では慶長3（1598）年の再建）にも表門や築地塀が付属しており、少なくとも江戸時代初期にはすでに存在していたものと考えられます。



その後、延宝年間ごろに再建されたという記録がいくつか残っています。上記「貝塚大工之由緒書…」には延宝3（1675）年、また寛延3（1750）年前後に記された「手鑑（てかがみ）」と「万記録（よろずきろく）」には延宝6（1678）年と延宝7（1679）年という再建年代が記されています。いずれの年代が正しいかは不明ですが、表門に備え付けられた龍の彫物が元禄3（1690）年に製作されていることから、おそらく17世紀後半にはその再建がなされたものと推測されます。

今回の修理事業の過程で、表門の屋根瓦は寛政3（1791）年に葺き替えが行なわれたことが明らかになりました（2ページ参照）が、古文書からは安政6（1859）年に彫物や部材の一部が修復されたことが明らかになっています。関係する古文書としては、見積もり書など6点が残っており、修復にかかわった大工名や工人数のほか、修復にかかる費用や寺内の町人などから集められた寄付金額など、さまざまなことを知ることができます。なかには、彫物や修復箇所を絵図面で記したもの（下写真参照）もあり、具体的な修復のようすがわかります。修復は安政6年1月から3月にかけて行なわれましたが、3月から4月にかけては願泉寺において浄土真宗の開祖親鸞の六百回忌が執行されていることから、この法要を目前に控えての修復だと考えられます。こうした本願寺門主の法要にあわせた修復は、上記の屋根瓦の葺き替え（本願寺11代顕如の二百回忌）や本堂の修復にも見られることから、願泉寺の建造物の修復時期を知る上での大きな特徴のひとつとなります。

以上が古文書から判明する表門の修復年代の全てですが、現在進められている修復事業で得られる成果とあわせることで、今後その修復の歴史をより詳しいものにできることでしょう。



安政6年の修復に関する古文書のひとつ

写真の古文書は、岸和田大工である「宇蔵」から「御役人様」（貝塚寺内地頭・願泉寺住職ト半家の家来衆）に宛てて出された表門の彫物に関する見積もり書です。表門脇の小板（右）および唐扉上の物見（左）部分に新調された彫物の図面とその代金が記載されています。ここに記載された彫物は現在も表門に残っています。

第87回かいつか歴史文化セミナー報告

「重要文化財願泉寺 現地見学会」を開催しました

平成21年6月28日（日）に、貝塚御坊願泉寺境内（貝塚市中）において、「重要文化財願泉寺 現地見学会」を開催しました。

当日は、修理設計を担当する財団法人文化財建造物保存技術協会の方の解説で、修理中の本堂、表門・鐘楼の順に見学し、本堂では、修理中の内部の様子を見ながら修理状況の説明を受けました。表門では、20名ずつ修復用の覆屋（素屋根）内部に登り、屋根瓦を外した小屋組の様子や各所に施された彫刻などを間近で見ることができました。また、鐘楼についても、覆屋（素屋根）に登り、屋根瓦が外された状態を見学しました。

願泉寺の見学後は、隣接する貝塚市立北小学校の校庭に移動し、過去に校内で実施した発掘調査の成果について説明をしたあと、調査で出土した屋根瓦や陶磁器などの遺物を見学していただきました。また、校内に残る姫松（千古ノ松）の切り株を囲みながら、江戸時代の絵図をもとに貝塚市内の政庁「卜半役所」について説明したところ、ご参加いただいたみなさんから「普段、下からしか見ることができない表門の彫刻を間近で見れてよかった」といった感想が寄せられました。



本堂内にて



表門にて



北小学校にて

※願泉寺は現在も重要文化財建造物の修理が進められているため、通常は見学できません。

※次回の願泉寺見学会は平成21年10月3日(土)に開催いたします。詳細は、広報かいつか9月号、貝塚市ホームページ（9月初旬ごろ）などでご案内します。

平成21年度貝塚市郷土資料展示室企画展のお知らせ ぼっかんさんの平成大修理Ⅲ

重要文化財願泉寺本堂・表門・鐘楼に関する資料（大阪府指定文化財の銅鐘〈右写真〉、屋根瓦、普請関係の古文書などを予定）を展示し、願泉寺修理事業の現況を紹介します。

会 期：平成21年9月5日(土)～10月18日(日)

会 場：貝塚市郷土資料展示室（貝塚市民図書館2階）

開室時間：午前9時～午後5時

観 覧 料：無料

休 室 日：毎火曜日、9月21日（月・祝）、23日（水・祝）、
30日（水・月末）、10月12日（月・祝）



古絵図をひも解く

◆神前（こうざき）神社と戎（えびす）池

右の絵図は、文政6（1823）年9月に作成された絵図です。加治・神前（現在の加神）・畠中・脇浜の4つの村が入り組んだ土地の境目をめぐって争ったことから、領主である岸和田藩がその決着を図るため、境界を明確に描くよう指示し作られたものです。絵図には現在の西小学校から株式会社セイサの本社・工場の東側にかけての場所が描かれており、戎池と呼ばれる大きなため池と、周囲を取り囲むようにいくつかの神社が建っていたことが確認できます。この辺りは、現在も小高い地形であり「長楽寺山（ちょうらくじやま）」という地名ものこされています。戎池は、今も近くに残る籠池（かごいけ）とともに、脇浜のかんがい用水として利用されていましたが、昭和17（1942）年大阪製鎖造機（現在のセイサ）の工場建設にともない埋め立てられたようです。

また、「妙見（みょうけん）さん」の名で親しまれていた神前神社（絵図左上）をはじめ、戎池を取り囲んでいた神社のほとんどは、明治40（1907）年11月に脇浜の高竈（たかおかみ）神社（脇浜戎大社）に合祀（ごうし）されました*。神前神社の跡地には、翌明治41年にその周辺の土地とを合わせて、現在の貝塚市立西小学校（当時は南北近義村学校組合立近木北尋常小学校）が開設されました。

このように神社の統合や大工場建設で、地域の景観は大きな変貌をとげました。古い絵図に描かれた神社や池は、全くその面影をとどめていません。しかし、当時の人びとの暮らしに大きな関わりがあった神社は学校に、ため池は工場や宅地にその姿を大きく変えています。



要家文書「件番社地境内図」

加治・神前・畠中・脇浜の4つの村で構成されている件（くだん）番の神社の境内を描いた図



絵図に描かれた場所（西小学校、東側から撮影）

※江戸時代には、それぞれの集落ごとに神社がまつられ、いわゆる「村の鎮守（まもり神）」として人びとの信仰を集めていましたが、明治40年代に、一つの町村には一つの神社を置くとする政府の政策によって、それまで市域にあった80か所をこえる神社は、阿理莫（ありまか）神社〈久保〉・稲荷神社〈森〉・感田神社〈中〉・高竈神社〈脇浜〉・西葛城神社〈木積〉・南近義神社〈王子〉にそのほとんどが合祀されました。

古文書講座

◆「江戸時代の新田開発」

平成21年5月30日（土）から5回にわたり、「江戸時代の新田開発」と題して古文書講座を開催しました。新田開発は、8代将軍吉宗や老中田沼意次らが積極的に推し進めた政策として有名で、江戸時代を通じて全国各地で年貢を増やす目的で活発に行なわれました。地元岸和田藩領内においては、ため池や用水の整備が進められ、谷筋に棚田や段々畑を開き、川沿いの荒れ地や藪などを開墾していききました。



講座では、開発の済んだ新田の持ち主に藩主が出した諸役を免除するお墨付きや、新田の土地質入れ・売買に関する証文、新田村の勘定目録などをテキストに、当時の新田開発や経営に関わった人びとの様子を解き明かしていきました。

参加者の方からは、「岸和田藩の人びとの農業の様子など苦勞をして農地を切り開いたことがよくわかりました」「新田といえば大阪では河内だけかと思っていましたが、泉州にも新田開発があったことを知りました」といった感想が寄せられています。

貝塚市内の耕地面積は、昭和15（1940）年に958町4反歩（約950.48ヘクタール）あった（『貝塚市史』より）ものが、平成17（2005）年になると約287.23ヘクタール（『大阪府統計年鑑〈平成20年度〉』より）となり、65年間で約3分の1にまで減少しています。大阪のベッドタウンとして都市化が進んだことに加えて、国の減反政策がかつての景観を大きく変貌させていきました。ほんのわずかな土地でも耕そうと努力した江戸時代の新田開発は、遠い過去の記録にのみその様子を留めています。

◆古文書講座（第31回）開催のお知らせ

「戦国から近世へ」

戦国時代から近世に移り変わる時期、現在の貝塚市域もまさに激動の時代でした。応仁の乱以来、和泉国の守護の座をめぐる権力争いが激しくなり、畠山氏や細川氏・三好氏らによる戦いが各地で繰り広げられました。その後、泉南・紀北に勢力を張っていた根来衆・雑賀衆は、近木庄（こぎのしょう）・木島庄（きのしまのしょう）などを地盤に活躍する土豪とともに、天下統一をめざす織田信長・羽柴（豊臣）秀吉と戦いました。このような時期にのこされた古文書をテキストに当時の人びとの様子を探っていきます。皆さまお誘いあわせの上ご参加ください。

日 時：平成21年9月26日－第1回、10月3日－第2回、10月10日－第3回、
10月17日－第4回、10月24日－第5回、いずれも土曜日午後2時～4時30分

場 所：貝塚市民図書館2階視聴覚室

申 込：住所、氏名、電話番号を明記の上、はがき・Eメール・FAX・電話
いずれかで、下記まで事前にお申込みください。

連絡先 〒597-0072 大阪府貝塚市畠中1-12-1（貝塚市民図書館2階） 貝塚市郷土資料室
TEL 072 (433) 7205 / FAX 072 (433) 7107
Email shakaikyoku@city.kaizuka.lg.jp

貝塚市の風景

～南海貝塚駅周辺～

日ごろ目にする何気ないまちの風景も、いろいろなところで日々変化しています。今回、南海本線貝塚駅周辺を中心とした風景のうつりかわりを紹介します。南海貝塚駅周辺は昭和40年～50年代に貝塚市の都市計画事業として貝塚駅西口を中心とした駅前広場の拡張など大規模な整備が行なわれ、平成に入って現在の駅舎になりました。平成21年3月には南海貝塚駅周辺のバリアフリー化に伴い、東口と西口にエレベーターが設置されました。また、水間鉄道貝塚駅改札口では、平成21年6月1日に、PiTaPaが導入され便利になりました。



貝塚中央商店街（昭和44年頃）



南海貝塚駅前の様子（昭和37年頃）



南海貝塚駅東口周辺（昭和37年頃）



貝塚中央商店街（平成8年頃）



現在の南海貝塚駅ロータリー



南海貝塚駅東口周辺（平成8年頃）



現在の水間鉄道貝塚駅改札



西口エレベーター

「なつかしの写真」募集

子どもの頃のなつかしの写真や昔の様々な場所の写真を募集しています。ご提供いただいた写真は、テンプスやホームページなどで活用させていただきます。

かいつか文化財だよりテンプス38号

平成21年7月31日発行
 貝塚市教育委員会
 〒597-8585 貝塚市島中1丁目17-1
 Tel (072) 433-7126 Fax (072) 433-7107
 Email : shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp
 印刷 (株)和歌山印刷所
 ※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。
 年4回発行：各1,000部
 印刷単価：67.2⁰円

